

## 人と術と風景と(ウィリスを巡る人々)

著者	河内 浩志
雑誌名	鹿児島大学医学雑誌=Medical journal of Kagoshima University
巻	47
号	Suppl. 1
ページ	113-114
別言語のタイトル	On Men, Arts and Landscape : Peoples Related to Dr. W. Willis
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/18302">http://hdl.handle.net/10232/18302</a>

## 人と術と風景と（ウィリスを巡る人々）

河内 浩志

ウィリスの曾孫 国立石川工業高等専門学校助教授

### On Men, Arts and Landscape — Peoples Related to Dr. W. Willis —

Hiroshi KOUCHI M. Eng.

A Great-grandchild of W. Willis, Associate Professor,  
Ishikawa National College of Technology, Ishikawa Prefecture

戦後生まれの私達曾孫の代になると、戦中に帰化し、直接の歴史の只中に翻弄された孫に当たる母の青年期と、その考えや思いはおのずと異なっている。それは、安寧の時代故か、私達は日々の忙しさの中に、歴史の实在感と離れて安心して住まってきたせいでもある。しかし、幼い時より語り聞かされた母を巡る人々の70余年の人生は、小説のごとく奇なる歩みではなかったか。国籍の異なる生い立ちに難儀し、彼らの祖母や父、そして自分自身に数奇な運命をもたら



ギフォード夫妻（ウィリス終焉の家にお住まい）と墓前にて

した、祖父ウィリアム・ウィリスを疎ましく思った時期もあったようだ。薄れ行く記憶の中で、ウィリアム・ウィリスの歴史の断片集は、戦前から親しくさせて頂いた故鮫島近二先生、常に暖かく接して下さった故佐藤八郎先生、御講演頂いた前駐日英国大使のヒュー・コータツツイ卿、森重孝先生、そして最初に北アイルランドにて調査された尾辻省悟先生等々多くの方々の御研究によって、私達の眼前に一つの生きた全体像として再生されてきている。遺族にとって、何よりの貴重な財産と言わねばならない。この歴史の究明の中で、母は、研究者によって発見されたウィリスの遺言書に接することができた。その中に書き残された遺児アルベルトへの愛情溢れる言葉は、かつて母に祖父アルベルトが語ってくれたウィリスの像とも重ね合わされて、母自らに与えられてきた歴史を、初めて自己の中で承認する機会を与えられたらしい。さらに、昨年放映された「遙かなるアルスターマン」—維新に生きた英医ウィリアム・ウィリス MBC製作—の映像は、医術の展開と人と人との交流を、私達に鮮やかに印象づけてくれた。北アイルランドの美しい風景と噴煙の鹿児島の風景の交錯を通して、私達に流れる血を掻き立てずにはおこななかった。

幸運にも昨年の7月16日に、尾辻省悟先生と母と私の3人で、何時も私達を孫子の様に心にかけて下さった佐藤八郎先生と御自宅にて、お話をする機会に恵まれた。佐藤先生は「ヒロシサン!! 医術ハネ、医療技術ダケデハダメナダヨ、病人ノ側ニイテ、床ニ臨ンデ、脈ヲトツテ、話ヲ聴カントネ。ウィリスサンハネ、ソレヲヤツタンダヨ、ワレワレモソレヲヤラントネ。」何故か先生にウィリスの像が写し合わされる思いがしたことを覚えている。短い時間ではあったが、佐藤先生は、ウィリスの事、MBCの放送予定の事等々、大変楽しそうに語られていた事が、強く思い出される。今は、先生の御冥福を心よりお祈りするばかりだ。建築を志す私は、先生の語られた術の心を建築学の初歩とし、建築術を実践するべく覚悟を新たにした。

昨年の夏、渡欧を計画していた私は、尾辻先生やMBCディレクターの新名主氏に北アイルランドの情報を詳しく頂くことができた。スイス、ドイツ滞在の後、8月5日の夕刻にロンドン経由ベルファーストに到着した。翌朝、レンタカーを借りて、高速で2時間、エニスキレンの街に到着。昼食の後に、キリッシャーの教会の裏のウィリス家の墓に詣でた。墓石に刻まれた「Dr. William Willis」の文字が何故だか強く心に残った。100年以上もの間、時間が止まっていたかのようなこの場所に立っていると、直前にお会いした佐藤先生、ここに来られた尾辻先生、新名主氏、そして母を巡る人々が、次々に風景の只中に現れた。身体が受けとめる、今、ここ、私は、静かな感動に深く感謝した。

思い起こせば、1906年(明治39年)3月、異国の地にあったウィリスの遺児アルベルト(33才)は、15年の歳月を経て、生母江夏八重と横浜埠頭で、正しく劇的な母子再会を果たしている。翌年8月14日に母子共に来鹿し、熱烈な歓迎を受けた歴史の風景は、今春、アルベルトの子と孫(ウィリスの孫と曾孫)の新たな母子の姿として、ウィリス没後100年記念顕彰の場に立ち会えた風景と重なる。身に余る歓迎を受け、歴史を自覚した瞬間でもあった。時空を越えたこの二つの風景は、鹿児島(日本)とアルスターの風景と共振し、私達遺族の心に深く刻まれた。

最後になりましたが、英医ウィリアム・ウィリス没後100年記念顕彰事業として、ヒュー・コータツツイ卿、森重孝先生の貴重な御講演、並びに懇親会等を盛大に催して頂きましたこと、鹿児島大学医学部の諸先生方、鹿児島日英協会の諸氏、関係諸機関の方々の御尽力に、この紙面をお借りし遺族を代表致しまして、心より御礼申し上げます。

散るちらぬ 術の彌栄 しま桜  
遠く伝えし ころろ心に

平成6年 春 金沢にて